

平成 23 年度御挨拶に代えて

3.11 東日本大震災に始まり、暮れた 1 年でした。

大切な人ともものが失われました。できることは何か、と焦りながら、無力な己に忸怩たる思いを募らせるばかりでした。

改めまして被災された方々に衷心よりお見舞い申し上げます。また、不幸にしてお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族に対して心よりお悔やみ申し上げます。これまで、そして今も復興支援活動に携わっておられる多くの方々に心から敬意を表すとともに、感謝申し上げます。被災地の皆さまが 1 日も早く穏やかな生活に戻れることを心よりお祈り申し上げます。

未曾有の有事にただただ圧倒され、年度初めの御挨拶のタイミングを逸したままでしたので、平成 23 年の当分野の出来事をダイジェストで御報告し、来年度に向けて簡単な御挨拶を申し上げたいと思います。

1. 学位取得者誕生(3 月)

こちらに赴任して 4 年目にして、ようやく直接指導の博士課程修了者が誕生しました。竹之下先生が舌痛症と非定型歯痛の精神科診断についてまとめた仕事です。単純に原因不明の慢性疼痛と一括して不定愁訴扱いされがちですが、両者には痛みの性状や好発年齢に違いが認められ、また精神科でつけられる診断も微妙に異なることを明らかにしたものです。臨床統計的な地道な研究でしたが、診断や病態解明の一助として臨床的にも大きな意義があります。



Miho Takenoshita, Tomoko Sato, Yuichi Kato, Ayano Katagiri, Tatsuya Yoshikawa, Yusuke Sato, Eisuke Matsushima, Yoshiyuki Sasaki, Akira Toyofuku : Psychiatric diagnoses in patients with burning mouth syndrome and atypical odontalgia referred from psychiatric to dental facilities. *Neuropsychiatric Disease and Treatment* Vol.6 : 699 – 705,2010.

残念ながら震災直後のため学位授与式が中止になってしまいましたが、時間の制約がある中で本当によく頑張って海外専門誌掲載にこぎつけた仕事でした。

次に学位審査を受ける院生たちにも大きな励みになりました。

2. 藤井先生の大学院特別講義(5月)



昨年に引き続き大学院特別講義（医歯学先端研究特論）で、理化学研究所 脳科学総合研究センター 適応知性研究チーム PIの藤井直敬先生に「つながる脳」と題して、最先端のお仕事をお話頂きました。

今回は外から観察できるサルの行動と脳の中で起こっている現象を同時に記録できるように独自に開発された実験装置を用いて、複数のサルが一緒に居る状況におかれた時に一体どのようなことが起こるのか？というとても興味深いお話が展開されました。

従来の脳の神経細胞の1つ1つの電気信号を記録する方法から個体の脳活動の観察への進歩を踏まえ、さらに社会の中（他者がいる環境下）で相手とどう適応しようとするのか、社会的要素を含んだ認知機能を解明しようとする壮大な挑戦です。脳機能の本質に迫るご研究で、僕らにはまだまだ理解の及ばない点多々ありましたが、非常に刺激的な時間でした。

3. 歯科と精神科連携懇話会（6月）

三井記念病院精神科の中嶋義文先生と本学心療・緩和医療学の松島英介先生の御協力の元、都内近隣の精神科医の先生方と勉強会を開催しました。

仕事柄、精神科の先生方にお世話になる機会がダントツに多いため、こちら（歯科側）からお願いした会でしたが、意外にも精神科の先生方からも「歯科との勉強会はめずらしい」と好評を頂き、連携を助け、深めるための思わぬ収穫を得ました。



4. 第26回日本歯科心身医学会（7月、札幌）

北海道医療大学臨床口腔病理学教室教授 安彦善裕会長、同小児歯科学教室教授 齊藤正人準備委員長のもと、第26回日本歯科心身医学会が開催されました。

教室として一番力を入れている学会であり、当分野からも4題の口演を発表しました。



活発な議論とともに復興支援のためのチャリティTシャツも販売され、懇親会も震災後の沈滞したムードを吹き飛ばすような盛り上がりを見せました。



最終日の研修会まで講師の先生にどんどん質問に行くなど、教室の先生にとって貴重な勉強の場となりました。



5. 中村廣一先生を囲む会（8月）



一昨年まで当分野の非常勤講師を担って頂いた元国立精神・神経センター武蔵病院歯科医長の中村廣一先生（学21）を囲んで納涼会を行いました。

ざくばらんな雰囲気の中、研究生活や臨床面にわたり、かなり深いレベルまで突っ込んだお話を覗うことが出来、大変ためになりました。

6. ICPM2011 (8月、Soule)

第21回世界心身医学会 (The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine) が韓国ソウルで開催され、当科から3題のポスター発表を提出しました。

大学院2年生の梅崎先生のポスターに、日大心療内科の村上正人教授と吾郷普浩先生 (日本心身医学会前理事長) からお声をかけて頂きました。

歯科関係の参加者はそう多くはなかったのですが、大学院4年生の佐藤先生の発表には海外のいろいろな専門領域の先生から質問を受けました。topicsは歯科に拘らず、皆で積極的にあちこちの発表を聴きに行きました。ち



よっと暑かった8月のソウルでした。

7. D4 研究体験実習と D5 合宿研修(10月)



恒例の歯学部4年生 (D4) の研究体験実習で3名が当分野に配属となりました。2か月ほどの実習を通して医員や院生の先生と一緒に研究活動がどんなものかを肌で体験します。今年の3人は非常に意欲的に実習に励んでいました。

また本学の伝統行事として、歯学部5年生 (D5) が臨床実習 (教官の下で実際に患者さんの歯に治療をする実習) に上がる直前に教員との合宿研修があります。今年の5年生は、とても仲好しで良い雰囲気です。70年代の大学生のようにギター片手に合唱するなど、現代っ子の思わぬ側面を垣間見てびっくりしましたが、こちらもとても懐かしいほんわりした気分になりました。きっとみんな患者さんに優しい歯科医師になることでしょう。臨床実習が楽しみです。

8. Prof.Bereiter 来科 (12 月)



2010 年春から、日大歯学部生理学教室 岩田幸一教授の御指導の元、大学院 3 年生の 片桐先生が三叉神経の慢性疼痛に関する動物実験に取り組んできました。同教授の招聘でミネソタ大学歯学部の David A. Bereiter 教授が来日され、当科外来にもお立ち寄りになりました。

岩田教授がおられるものの、慣れない外国の研究者にどぎまぎしました。米国では考えられないほど多数の患者さんにどうやって

対応するのかと質問され、「優秀な secretary がいる！」と即答しましたところ、“very important !!” と笑顔で納得されていました。

9. 本学精神科との合同セミナー

予てより要望が高まっていた本学精神行動医科学分野との合同勉強会が「第 1 回精神科・歯科心身医療外来による医科・歯科連携セミナー」として開催に至りました。

西川教授にもご参加頂き、今回はテーマを「口腔内セネストパチーの治療における医科と歯科の連携」とし、両科で共有する症例の検討から始まりました。

非常に難しい病気で、なかなか治りにくく、未だ特効薬や決め手となる治療法が確立しているとは言い難いのが現状です。ですが、この病気の患者さんは一般に言われているよりかなり多いようで、苦痛も大きくとても困っておられます。すっきりさわやか、とまでは行かずとも、何とか普通の生活を取り戻せるように持って行きたいところです。

医科歯科大学の強みを生かして、今後も両分野で協力してより良い治療や病態解明を目指していきたいと思えます。



10. 忘年会&壮行会



年明けからミネソタ大学に留学が決まった片桐先生の壮行会も兼ねて、本年の忘年会を開催しました。学部の学生さんも交えて和やかに美味しい餃子に舌鼓を打ちました。

いろんなことがあった1年間でした。予想以上に上手く行ったこともあれば、震災や原発事故のような思わぬ悲劇もありました。

日々の臨床や研究においても首尾よく行くこともあれば、もち

ろん一筋縄ではいかないことも多々あります。力量不足に臍を噛み、忸怩たる思いや口惜しさに歯ぎしりすることもあります。いろいろな先生方のお力添えを得ながらも、着実に、堅実に、一例一例を大切に実績を積み重ねるしかありません。

東京医科歯科大学という伝統ある老舗に新設された若い教室の任を受け、無我夢中で走ってきた4年半でした。次の任期更新は5年後。どんな世の中になっていることでしょうか。いや、どんな世の中にしていくべきでしょうか。昭和のような右肩上がり、行け行けどんどん、とはいかないでしょう。しかし、立ちはだかる壁は自分で乗り越えないといけませんし、途切れた道は自分で切り開かないといけません。

大学院の一分野（教室）であり歯学部の一専門領域として、歯科心身症で困っている患者さんたちにもっとお役に立てるように、若い先生たちが持っている可能性をもっと開花しやすい環境作りを目指したいところです。

2012年1月

豊福 明